

優秀賞



ダブルSの人生

青森県弘前市立北辰中学校

二年 齊藤 栖佳

「やらない。」

そう言えばよかった。今さら後悔している。

中学二年生、吹奏楽部（S）兼相撲部（S）の僕は小学5年生の時の僕をずっと不思議に思っている。「やりたくないものを無理にやる必要があるのか。」相撲をやっている時頭の中にこだましている。僕は相撲なんて好きじゃない。でも、相撲の先生は必ず切れた電池の僕をチームに入れる。僕はなぜ周囲の人たちが反対しないのがわからない。

音楽は昔から好きだった。小学一年生の時から男子初の楽器部員になろうと思っていた。実際、小学五年と六年の時にリコーダーアンサンブルのついでで金賞をとっている。中学に入学して吹奏楽部に入った理由もその金賞とマイフルートがあったからだ。中学一年ではアンサンブルコンテストの打楽器三重奏で銀賞をとっている。

ただ、なぜか好きな音楽より大嫌いな相撲の方が成績が良い。小学六年生で東北大会団体優勝。中学二年生で三年生の軽量級で全国大会に出場している人に叩き込みで勝った。おじは、

「おめえは相撲が嫌いかもしれねえけど、おめえは相撲の神様に愛されでる。」

と言う。もちろんそんな愛は一ミリも必要ない。

母は僕に何度かこう言った。

「四股って全身運動で体幹がつくから、吹奏楽部にも有利なんだ。」

一年生の時は何を言っているのかわからなかった。ただ何となく今はわかってきた。ただ一つの相撲と吹奏楽の共通点だ。相撲の股割り、四股、すり足など基礎はちゃんとやればきつい分、体幹がつく。それがつくと吹奏楽で長くて良い音になる。母がこんなことも言っていた。

「わんどの時は、校内を走って腹筋やって背筋やってなぜか腕立がらの基礎錬だがらな。そうじゃねえど音を支えねえがらな。」

中学二年生になっても気持ちは何も変わらない。しかし力は格段に変わっているようだ。なぜなら、今まで勝てなかった人に勝ったり、軽量級で八位になったりしているからだ。先日は鱈ヶ沢中の人たちに、

「よう、神。」

となぞのあいさつをされた。聞いてみると、中学生の軽量級のチャンピオンに勝ったことが鱈ヶ沢中の伝説となっていてらしい。もちろん、実感はない。ただ、格段に強くなっている。

僕は相撲が嫌いだから音楽を聞きながら気を紛らわせ練習へ行っている。好きな曲を聞きながらだと少しは気持ちいが和らぐ。時々、

「なんで切れた電池、枯れた花の僕を使おうとするのだろう。」

という答えのない自問自答をし、なぜか泣き出すことがある。

今となったら嫌いな相撲も吹奏楽部のための筋力をつける道具としてみえてきた。さらに吹奏楽部でもいろいろなダメなところを自分でみつけられるよ

うになってきた。それでもおじからももらったマイフルートでいろいろな曲を吹きながら、一年生のころに比べたらかなり上手になっていると思う。

ある映画でこんな言葉を言っていた。

「すべてのものが結び。」

そうだ。このダブルSの人生は僕だけについた結びなんだ。そう思ったら、何だかこの人生も受け入れられる。相撲をやっているのも結び。吹奏楽をやっているのも結び。自分が積んだものは完全に消すことはできない。だから、ダブルSという積み木を築しむ。